

明治期北海道におけるシカの狩猟頭数を推測する素材

山田伸一

Key Words

シカ (Deer)、狩猟 (Hunting)、開拓使 (The Hokkaido Development Commission, Kaitakushi)、札幌県 (Sapporo Prefecture)

はじめに

私はこれまでに明治初期を中心に北海道における人間によるシカの利用や狩猟規制について調べてきた(山田2001ほか)。その内容を話す機会に、その頃にはシカがどのくらいいたのか尋ねられることがある。様々な調査手法が発達した現在においても、野生生物の生息数を正確に把握することは容易ではない。それが過去のこととなると一層そうだ。

生息数が無理なら、猟獲数ならどうか。幸いなことに明治期の北海道においては、シカの猟獲数を推測する素材となり得る数値が残されていることが知られる(犬飼1952; 俵1979ほか)。

もともと、それらの数値には限界がともなっている。そもそも統計値が残されるのは、手間暇かけてその数値を把握する必要性があった場合に限られる。多くの場合、その作成主体は行政機関だった。その数値の正確さの程度は、当時の行政機関がどの程度各地域への浸透力を持っていたのかといったことにも左右されると言える。

本稿の前段では、明治期北海道におけるシカの猟獲数を推測する素材となり得るいくつかの数値を、それぞれの数値の性格についても説明しながら提示したい。それらの数値のほとんどは、すでに私自身、もしくは先行する研究者によって紹介されてきたものだが、性格の異なる複数の数値をどう組み合わせ、より正確な猟獲数の変遷に迫るのかという観点から全体を通して検討されることは案外なかった。本稿はその足がかりとなることを目指したい。

私が今回本稿を記すきっかけとなったのは、こうした基礎的作業を欠いて作成された表の数値が、明治期のエゾシカ狩猟数として近年広く出回っていることにある。本稿の後段では、その表、すなわち『野生動物分布等実態調査報告書—エゾシカ生態等調査報告書』(北海道生活環境部自然保護課1987)が掲載する「エゾシカ捕獲

統計(1)」と題する表について検証し、これがまったく信用できないものであることを明らかにする。

1 諸統計から

(1) 『開拓使事業報告 第三編 物産』

開拓使(1869年7月~1882年2月)の時期の統計としては、開拓使廃止後にその事業全般をまとめた『開拓使事業報告』の第三編「物産」に「陸産表」としてまとめられたものがある(大蔵省1885)。このうちシカに関する物産に「鹿」「鹿皮」「鹿生角」「鹿落角」「鹿晒角」「鹿爪」「鹿胎子」「鹿油」があり、以前その全体を対象にして表に整理したことがある(山田2015)。ここでは、そのうち「鹿」と「鹿皮」のみを抜き出し、表1を作成した。

「本庁」の名称に引っ張られて誤解されがちだが、札幌本庁・函館支庁・根室支庁の管轄する範囲は並立関係にある。札幌本庁の管轄範囲が両支庁の管轄範囲を包摂するわけではないということだ。他にいくつかの支庁があった時期もあるが、『開拓使事業報告』は開拓使廃止時点の体制に従って全体を編成する方針を採っている。

表1についていくつか述べておく。

第一に、この「陸産表」がどうやって作成されたのか、という問題がある。『開拓使事業報告』のもととなる原稿は、本支庁それぞれが作成し、それを編集事務局が整理を重ねて最終原稿を作成していったことが、北海道立文書館所蔵の数段階にわたる原稿からうかがえる。

「陸産表」についても同様と思われる。では、本庁と両支庁は何を素材にして「陸産表」の原稿を作成したのか。毎年の物産の産出状況を把握した数値がすでにありそれを集約したのか、あるいは、原稿提出を求められてから郡役所など管内出先に照会をしてその回答を集約したのか。この点、非常に重要と思われ、またその過程をうかがい知る史料もありそうだが、今は立ち入って論じる準備がなく、留意すべき点として指摘するにとどま

表1 『開拓使事業報告』の物産表より「鹿」と「鹿皮」

	札幌本庁		函館支庁		根室支庁		合計	
	鹿頭数	鹿皮枚数	鹿頭数	鹿皮枚数	鹿頭数	鹿皮枚数	鹿頭数	鹿皮枚数
1870 (明治3)					3,014 2,107円786	3,014 557円500	3,014 2,107円786	3,014 557円500
1871 (明治4)					5,015 3,670円980	5,015 1,521円000	5,015 3,670円980	5,015 1,521円000
1872 (明治5)					4,008 3,006円000	4,008 1,212円000	4,008 3,006円000	4,008 1,212円000
1873 (明治6)	4,526 1,365円000	47,784 13,322円100			7,215 6,114円000	7,262 2,953円000	11,741 7,479円000	55,046 16,275円100
1874 (明治7)	2 7円500	52,895 17,194円264			5,523 4,611円000	5,603 2,783円000	5,525 4,618円500	58,498 19977円264
1875 (明治8)	23,460 25,283円445	70,024 24,691円216	0 0	0 0	6,438 5,483円000	6,398 3,083円500	29,898 30,766円445	76,422 27,774円716
1876 (明治9)	14,908 16,255円120	58,034 17,600円060	0 0	109 37円515	6,462 5,204円000	6,450 2,226円000	21,370 2,1459円120	64,593 19,863円575
1877 (明治10)	9,778 12,625円354	33,708 9,367円304	91 149円800	51 18円460	10,213 8,691円500	10,173 3,355円900	20,082 21,466円654	43,932 1,2741円664
1878 (明治11)	11,864 14,761円829	24,529 7,559円964	137 296円500	96 33円500	5,684 6,140円000	5,844 2,000円000	17,685 21,198円329	30,469 9,593円464
1879 (明治12)	10,680 11,624円966	35,036 12,408円541	370 661円050	68 22円780	11,211 9,175円000	11,281 4,192円000	22,261 21,461円016	46,385 16,623円321
1880 (明治13)	5,515 8,183円631	7,659 3,683円330	468 1,609円786	408 284円950	4,491 3,985円000	4,591 1,691円500	10,474 13,778円417	12,658 5,659円780
1881 (明治14)	15,503 34,329円375	6,080 3,871円200	1,390 3,379円398	1,364 825円324	2,742 2,716円400	2,762 1,491円500	19,635 40,425円173	10,206 6,188円024

出典) 『開拓使事業報告 第参篇 物産』48-49、71-73、131、194-195、209-210頁。
各欄の下段は「通価」

る。

第二に、この表には、札幌本庁の1870～72年の分、函館支庁の1870～74年の分の記載がない。これらの年に両庁の管轄内でシカが猟獲されていないはずはなく、これは統計の欠落と考えられる。また、函館支庁の1875年のゼロも支庁の把握が行き届かないものだろう。

第三に、狩猟頭数に迫るために考えるべきこととして、「鹿皮」が猟獲されたシカの体軀からはいだ皮を指し、シカ1頭について1枚だと見なすことができるのに対し、「鹿」とはどのような状態のシカを指すのか、という問題がある。考えられる可能性の一つは、「鹿」は皮をつけたままの体軀を産出した場合を指す、というものだ。そうだとすると、「鹿皮」と「鹿」に個体の重複はないから、シカの猟獲数に近づくには、その二つの数値を合計すればよく、好都合だと言える。

が、開拓使の早い時期においては、皮を主目的としたシカ猟が行われ、肉は輸送の困難や腐りやすさから打ち捨てられることが多かった(山田 2015)。それを念頭において表1を見ると、札幌本庁の1881年や函館支庁の各年について「鹿皮」の数を「鹿」が上回っていることが引っかかる。

また、根室支庁の各年については、「鹿皮」と「鹿」の数値が一致するか近い値になっている。把握できたシカ皮の産出枚数を「鹿」欄にも書き込むといったことが

あったのだろうか。いずれにしても、根室支庁について「鹿皮」と「鹿」を合計してシカの猟獲数の推計値とするのは危険だろう。

さらには、表1のすべての時期、すべての地域において、統一された基準で数値を記入しているかも怪しいところがある。

結局のところ、現時点では性格がよくわからないこの「鹿」欄の数値を、猟獲数を推測する素材に使うことはできない。一方で「鹿皮」は、実際のシカ皮産出量との誤差は予想されるにしても、1枚につき1頭の猟獲があったものと見なすことはできる数値だと言える。毛皮を剥いていない体軀全体の形で産出したものは含んでいない可能性は残るから、実際の猟獲頭数よりは少なめだろうという留保をした上で、これを目安の数値として使用するのが最も無難なのではないだろうか。1970・80年代に開拓使期のエゾシカの狩猟状況を論じた文献が、猟獲数そのものを示すことはせず、この「陸産表」のうち「鹿皮」の数値をもとにグラフや表を作成し、シカ皮産出数の推移をたどることで全体の傾向を論じていたのは(俵 1979、1990；藤原 1985)、限界を抱える統計を扱う姿勢として適切だと考える。

(2) 『札幌県第一回勸業年報』

次にあげられるのは、『札幌県第一回勸業年報』に「自明治十年至同十五年 鹿猟表」の表題で掲載され

表2 1877～82年のシカ猟獲高

国名	胆振国	日高国	十勝国	合計
1877 (明治10)	5,588	29,068	14,710	49,366
1878 (明治11)	8,647	15,649	45,200	69,496
1879 (明治12)	7,589	9,051	15,071	31,711
1880 (明治13)	733	11,656	15,458	27,847
1881 (明治14)	2,565	5,780	16,667	25,012
1882 (明治15)	5	133	15,291	15,429

出典 『札幌県第一回勸業年報』148頁

表3 胆振・日高各郡からのシカ皮移出枚数 (1878～79年)

(枚)

	胆振国		日高国					総計
	千歳・勇 払・白老郡	沙流郡	静内郡	三石郡	浦河郡	幌泉郡	計	
1878 (明治11)	14,120	18,934	112	1,070	1,883	100	22,099	36,219
1879 (明治12)	10,670	15,018	3,535	1,177	287	260	20,277	30,947
1880 (明治13)	2,513	3,785	2,330	210	340	-	6,665	9,178

出典 『租税ニ関スル件 明治十三年同十四年』開拓使札幌本庁租税課 (簿書 4645、36件目)

ているものだ(表2)。札幌県は開拓使廃止と同時に函館・根室両県とともに設置され、その管轄地域は開拓使札幌本庁をそのまま引き継いでいる。

この文献は、開拓使設置以降のシカの減少過程についてまとめた文章で説明している点でも有用で、以前から引用されてきた(犬飼 1952ほか)。

この表の数値を札幌県がどのように得たのかは確認できないが、この時期の各種の調査の例を考慮すると、各郡区役所に照会して寄せられた数値を集約したものではないかと思われる。1881年以前の開拓使期の分については、開拓使札幌本庁が把握していた数値を引き継いだものを利用したのかもしれない。

この表の範囲は、表1のうち札幌本庁の分に限られる。また、札幌県内でも石狩・後志・北見各国は含んでいない。

(3) 胆振・日高各郡からのシカ皮移出数

これらの刊行物とは別に、開拓使札幌本庁租税課の簿書のなかにシカ皮をはじめとするシカ関係の産物に関するものがあり、以前紹介したことがある(山田 2015)。1878～80年の3年分について、胆振・日高各郡におけるシカの角・皮などの「輸出人」の氏名と各「輸出人」が「輸出」した数量を一覧にしたものだ。ここでの「輸出」は外国への輸出の意味ではなく地域外への移出を指していると思われる。1873～75年頃の開拓使札幌本庁は、シカの角と皮を買い入れて地域外に移出しようとする者は事前に開拓使

に出願して許可を得よう義務づけ、許可を与えた者に課税をしていた(山田 2015)。税務を担う租税課が把握する数値の正確性は比較的高いのではないかと思われる。この一覧から「鹿皮」のみを抜き出し、「輸出人」ごとの内訳は無視して年次と国郡によって整理した(表3)。

この表の範囲は、表1の札幌本庁の分と重なるが、石狩・後志・十勝・北見各国の分を含まない。

(4) 表1～3の比較

これら三つの表には年代が重なる部分がある。それを比較することで、実際の猟獲数に近づく手がかりを得られないだろうか。限られた期間に過ぎず、どこまで意味があるかは覚束ないが、多少試してみる。

表4-1は、表1から札幌本庁の「鹿皮」の数値を抜き出し、表2と表3のそれぞれと比べてみたものだ。

まず表2と比べると、1879年以外の4年分について表2の数値が大きく上回っている。5年間の合計では90%も上回っている。ここからは表1の「鹿皮」は実際の猟獲数よりはだいぶ少ないのではないか、という問いが浮上

表4 三つの数値の比較
4-1 表1と表2・3の比較

	札幌本庁産 出の鹿皮 (表1より)	胆振・日高・十勝のシ カ狩猟数 (表2より)		胆振・日高からのシカ 皮移出 (表3より)	
	A (枚)	B (頭)	B/A (%)	C (枚)	C/A (%)
1877 (明治10)	33,708	49,366	146.45		
1878 (明治11)	24,529	69,496	283.32	36,219	147.66
1879 (明治12)	35,036	31,711	90.51	30,947	88.33
1880 (明治13)	7,659	27,847	363.59	9,178	119.83
1881 (明治14)	6,080	25,012	411.38		
1877～81の計	107,012	203,432	190.10		
1878～80の計	67,224			76,344	113.57

表4 三つの数値の比較
4-2 表2と表3の比較

	表2より			表3との比較					
	胆振	日高	合計	胆振国千歳・勇払・白老郡		日高国5郡の計		胆振・日高の合計	
	D (頭)	E (頭)	F (頭)	G (枚)	G/D (%)	H (枚)	H/E (%)	I (枚)	I/F (%)
1878 (明治11)	8,647	15,649	24,296	14,120	163.29	22,099	141.22	36,219	149.07
1879 (明治12)	7,589	9,051	16,640	10,670	140.60	20,277	224.03	30,947	185.98
1880 (明治13)	733	11,656	12,389	2,513	342.84	6,665	57.18	9,178	74.08
1878~80の計	16,969	36,356	53,325	27,303	160.90	49,041	134.89	76,344	143.17

する。もっとも、表2の作成過程も不明なことを考えると、この比較だけから、例えば札幌本庁分について表1の数値を1.9倍程度して猟獲数の推計値を出すといった操作をするのは、慎重さを欠くように思われる。

また、表3と比べると、やはり1879年以外の2年分は表1の数値を上回る。3年間の合計では14%ほど表3が多い。表3が当時シカの移動によってシカが増えていたとされる十勝国を含まない数値であることを考えると、表2との比較から浮上した表1の「鹿皮」が猟獲数よりだいぶ少ないのではないかと、との疑いはより濃くなる。もっとも、表1の札幌本庁分が、十勝国や北見国の分を含んだ数値なのか、疑問の余地がある点は、注意しておきたい。

(5) 物産表より

以上見てきたのはいずれも、これまでも表の形に整理されて紹介されたことがある数値だ。これらを補う可能性がある素材として、開拓使と札幌県の物産表がある。

これは、各町村の物産を半年ないし1年ごとに指定書式に従って一覧表にしたものだ。それを綴って簿書の形態にしたものを北海道立文書館が所蔵している。

町村という小さな単位で数値を把握できるのがこの史料の魅力である反面、時期によって書式や記入すべき項目の変化が大きいの、限られた地域・年代しか残っていないといった難点から、全体状況を眺める素材とはしにくい面もある。

これらの物産表のうち「鹿」とあるものを集計して表5-1と5-2を作成した。年によっては単価や通価(合計額)といった情報も記しているが、ここではそれらは略し、頭数のみを集計している。この「鹿」が狩猟数なのか売買の対象となった数なのかは、ここでもはっきりしない。1880年の開拓使函館支庁の書式の凡例中には「鳥獸類及ヒ水獸類共皮付皮剥ヲ別タス都テ売鬻ニナリタル価値ヲ積算シテ通価ヲ記入スルモノトス」と「通価」欄には売買価格の合計を記すよう指示する文が見え(簿書4068ほか)、調査主体の関心の重点は売買されたものにあることがうかがえるが、だからと言ってその関心が実際に記入された頭数の数値にまで徹底されているとは言い切れまい。

まず表5-1をもとに、開拓使札幌本庁・札幌県の分について表1・表2と比べてみる。1879・80年については特に指摘できる点はない。1881年については、総計が26,687頭と、表1の「鹿皮」6,080枚の4倍以上の数値を

表5-1 諸物産表より開拓使札幌本庁・札幌県管内のシカ猟獲数

		石狩国	後志国	日高国	胆振国	十勝国	北見国	天塩国	計
1879 (明治12)	1~6月	-	-	823	-	-	-	-	823
	7~12月	0	0	-	-	-	-	-	0
	計	0	0	823	-	-	-	-	823
1880 (明治13)	1~6月	0	0	209	-	575	0	0	784
	7~12月	-	0	1,176	-	1,173	-	-	2,349
	計	0	0	1,385	-	1,748	0	0	3,133
1881 (明治14)	1~6月	0	0	614	3,515	22,528	0	0	26,657
	7~12月	-	0	-	-	30	-	-	30
	計	0	0	614	3,515	22,558	0	0	26,687
1882 (明治15)	1~6月	0	0	128	0	23,695	0	0	23,823
	7~12月	0	0	5	0	8,382	0	0	8,387
	計	0	0	133	0	32,077	0	0	32,210
1883 (明治16)	1~6月	-	0	-	-	-	-	-	0
	計	-	0	-	-	-	-	-	0

出典) 北海道立文書館所蔵の以下の簿書による。4560、4561、4562、4563、4564、4565、4566、4567、4568、4569、4570、4571、4572、7419、7420、7421、7423、7424、7425、7426、7427、7428、7429、7430、7431、7432、7433

* 「-」は史料欠を示す

表5-2 諸物産表より開拓使函館支庁管内のシカ猟獲数

		(頭)			
		渡島国	後志国	胆振国	計
1876 (明治9)		-	0	-	0
1878 (明治11)	1~6月	27	0	0	27
	7~12月	110	0	0	110
	計	137	0	0	137
1879 (明治12)	1~6月	240	2	0	256
	7~12月	111	3	0	114
	計	351	5	0	370
1880 (明治13)	1~6月	206	0	0	206
	7~12月	197	0	3	200
	計	401	0	3	404
1881 (明治14)	1~6月	1,125	0	3	1,128
	7~12月	262	0	0	262
	計	1,387	0	3	1,390

出典) 北海道立文書館所蔵の以下の簿書による。1788、1789、1790、1791、1792、1802、1803、1804、2656、2657、3333、3334、4066、4067、4068、4069、4070、4071、4072、4073、4074、4075、4076、4750、4751、4752、4753、4754、4755、4756、4757、4758、4759、4760、7638、8342

*1879 (明治12) 年1~6月については合計値に齟齬がある

表6 シカ皮産出数 (1905~19年) (枚)

1905 (明治38)	383
1906 (明治39)	255
1907 (明治40)	179
1908 (明治41)	489
1909 (明治42)	258
1910 (明治43)	183
1911 (明治44)	62
1912 (明治45)	54
1913 (大正2)	16
1914 (大正3)	34
1915 (大正4)	107
1916 (大正5)	59
1917 (大正6)	48
1918 (大正7)	42
1919 (大正8)	16

出典) 『北海道庁統計書』に掲載の「野獣皮」のうち「鹿皮」

記す。この数値は表2の同年の合計数25,012頭に近い。表1のこの年の札幌本庁分の「鹿皮」の数値は実際の狩猟数よりだいぶ少ないのではないかと、との疑いはより濃厚になると言えるだろう。内訳に踏み込むと、十勝国の数値が表2の1.35倍とやや多い点が目を引く。

1882年の十勝国の分についても表2では15,291頭が表5-1では32,077頭と約2.1倍もの数値を記す。どちらの表が実態に近いのか判断を保留したうえで記すと、少なくともこの2年分の十勝国については表2の数値が実際よりも少ない可能性があるとは言えるだろう。同年の胆振国については物産表が一通り残っているが「鹿」はゼロで、表2がこの年の胆振国での猟獲数をわずか2頭としているのは、実態にごく近いのではないかと思わせる。同年の日高国について著しい減少傾向が見られる点についても二つの表は合致する。

また、表5-1からは、表2が石狩・後志・北見・天塩国の分を欠いていたのは統計の欠落ではなく、この時期のこれらの地域ではシカの猟獲が皆無かそれに近かったことの反映と見る方が自然と思われる(ただし、北見国の東部については行政の未浸透による把握漏れもあるかもしれない)。

次に開拓使函館支庁の分について表5-2を見ると、1878・79・81年の3年分については表1の「鹿」と数値が合致する。残る1880年の分も数値の大きな乖離はなく、表1の数値を補正すべき要素は見当たらない。表5-2から新たに指摘できる点としては、函館支庁管内のシカ猟獲のほとんどは渡島国におけるものだったという点くらいだ。

ところで、この物産表と『開拓使事業報告 第三編』の「陸産表」とは名称も性格も似通っており、両者は同じ調査作業の結果を使用しているのではないかという考えに誘われる。数値の一致が見られた開拓使函館支庁に

ついては、物産表をもとに「陸産表」の原稿を作成した可能性は高そうだ。が、それが全体について言えるかとなると、私の考えは否定の方に傾く。多くの年の書式については「獣類」や「禽獣」の部のなかに「鹿」がある一方で、シカ皮に関わる項目は、1880年と81年の函館支庁の書式に「禽獣類」と別に「獣皮類」の部があるなかに「鹿」がある以外は、項目自体が見当たらないことが、その最大の根拠だ。

(6) 北海道庁統計書より (1905-19年)

シカの減少を受けて、北海道内のシカ猟規制は強化される(山田 2010、2011)。1879年11月には十勝国一円と胆振国植苗村字美々から4里四方は在籍するアイヌ民族以外は禁猟、翌1880年3月には釧路国に同様の禁猟措置がされる。そして1889年3月23日北海道庁令第22号は全道で禁猟とした。それから11年を経て1900年11月8日農商務省令第4号は、北海道内のシカ猟を再び解禁する。

それ以降の狩猟数を推測する素材としては、毎年刊行された『北海道庁統計書』が「野獣皮」の項目のなかに「鹿皮」の枚数を掲載したものがあ(表6)。その範囲は、1905年から19年までに限られるものの、貴重な素材と言えるだろう。

2 『野生動物分布等実態調査報告書—エゾシカ生態等調査報告書』(北海道生活環境部自然保護課、1987年)

(1) 表の概観

近年、明治期のエゾシカ狩猟数の変遷を示す数値として、本稿1での検討からはかけ離れたものが広く出回っている。開拓使期における最多の年で13万頭近く(梶

表1 エゾシカ捕獲統計(1)

年	頭数	皮数(枚)	合計(頭)
1873	110,002	55,046	165,018
1874	116,996	58,498	175,474
1875	129,166	64,583	190,749
1876	87,864	43,932	131,739
1877	60,938	30,469	91,407
1878	69,496	30,000	94,496
1879	31,711		
1880	27,817		
1881	25,012		
1882	15,429		
1890 - 1900	禁猟、	1901 解禁	
1905	383		
1907	179		
1908	489		
1909	258		
1910	183		
1911	62		
1912	54		
1913	16		
1914	34		
1915	107		
1916	48		
1917	48		
1919	16		
1920	禁猟		

写真1 『野生動物分布等実態調査報告書-エゾシカ生態等調査報告書』
(北海道生活環境部自然保護課、1987年)より

ほか 2006 ; Agetsuma 2018)、あるいは19万頭にも達する数値をグラフなどで示している(宇野 2017 ; 水島 2019)。これは『開拓使事業報告 第三編』掲載「陸産表」の「鹿皮」と比べて、2、3倍にもなるものだ。

これらはいずれも北海道生活環境部自然保護課が1987年に刊行した『野生動物分布等実態調査報告書-エゾシカ生態等調査報告書』の「Iはじめに」に「表1 エゾシカ捕獲統計(1)」として示された表に依拠している(写真1)。この表の数値は確かな根拠に基づくものなのだろうか、確認が必要だと思われる。なお、混乱を避けるため、以下、この表を《表1》と記す。

《表1》を見ると、いくつか気になることがある。

第一は、典拠の記載を欠いていることだ。これらの数値が何に基づくのか、示していない。この次のページには1955~86年分の統計をまとめた「表2 エゾシカ捕獲統計(2)」を掲載し、その下部に「(北海道生活環境部自然保護課資料)」と記す。この記載の仕方から、《表1》の典拠も同じなのではないかと推測する余地はあるが、そう断定はできない。本稿1での検討からわかるように、誰が集約したものであれ、《表1》の対象時期のシカ狩猟頭数の変遷は、性格が異なるいくつかの文献・史料をつぎはぎするしかない。それぞれの数値は何に依拠したのか、どういう考え方でその数値を採用したか、説明がないのは、この表の大きな欠点だと言える。

第二に、「頭数」欄はそれぞれの年のエゾシカ捕獲数を、「皮数」欄は産出されたシカ皮の枚数を示すように

見える。それでは、この二つの欄の数値を合計したらしき右端の「合計」欄は何を示すのだろうか。表題が示すこの表の趣旨からは、猟獲頭数の推計値だと受け止めるのが自然だ。が、この足し算に意味があるのは、「頭数」欄が示すのはシカ皮を含む体躯全体を指し、「皮数」欄の数値とは個体の重複がないと判断できる場合に限られるだろう。そんな判断ができるような素晴らしい数値をどこから得てきたものか、ぜひ知りたいものだ。なお、試みに各年の「頭数」欄と「皮数」欄の数値を足してみても、「合計」欄と一致するのは、1877年だけで、他の年についてはどこかの桁の数字が食い違っている。計算の誤りか、誤植なのか、戸惑いを覚える。

第三に、1878年と79年の欄の間に実線が引かれ、1879~82年については、78年までと違って「皮数」の記載がない。これは何を意味するのか。

(2) 典拠は何か？

次に、本稿1の各表と見比べ、《表1》の数値の典拠を探ってみる。

わかりやすいのは、1879~82年の「頭数」欄の数値だ。これは『札幌県第一回勸業年報』(表2)の数値と完全に一致する。1878年と79年の間の実線やその前後での「皮数」欄の記入の有無の違いは、1878年以前との典拠の違いを反映したものなのだろうか。

1905~19年の「頭数」は、『北海道庁統計書』(表5)の数値とほぼ一致する。「ほぼ」というのは、

1906、18年の2年分は『北海道庁統計書』掲載の数値を反映しない欠落があり、1916年の分は転記ミスかと思われる数字の違いがあるからだ。

残る1873～78年の分は厄介だ。「皮数」欄の数値のうち1873・74年については『開拓使事業報告 第三編』（表1）の「鹿皮」の合計値と合致する。しかし、1875・76・77年の3年分は、同じ『開拓使事業報告 第三編』（表1）の「鹿皮」の合計値だが、1876・77・78年の数値と合致する。つまり、1年ずつずれているのだ。この3年分は、『開拓使事業報告 第三編』から転記する際に誤ったように見える。さらに、同書の「鹿皮」に従えば30,469枚が正しいはずの1878年の「皮数」には、この数値を採用せず、30,000枚という妙に切りのいい数字を記す。

「頭数」欄はどうか。

本稿1の各表といくら見比べても、この欄の数字との対応を指摘することは私にはできない。これと「皮数」を合算していることから『開拓使事業報告 第三編』の「鹿」の数値に関係しているのではないかと思っただが、関係は認められない。理屈から言えば、本稿1で見た以外の文献や文書がどこかに（例えば当時の道生活環境部自然保護課内に）あったのではないかとと思われるが、この時期の史料の残り方を考えるとそれはあり得まい。いずれにしても、根拠が示されず、見つけることもできない数値を、仮にでも信じることはできない。

むしろ、この6年分の「頭数」欄のほぼすべてが「皮数」欄の数値を2倍したものと合致している点が、この数値の背景を推測する鍵になるのではないだろうか。ここでも「ほぼ」と記すのは、1873年については十の位だけが一致せず、1878年については万の位は一致するが残り4桁の数字は一致しないからだ。

これをどう理解したらいいのか？ 次のような過程があったと想像する他ないのではないかと私は考える。

《表1》の作成者は、各年のエゾシカ狩猟数の数値をできるだけ得ようとしたが、この6年間については『開拓使事業報告 第三編』掲載の「鹿皮」の数値しか得られなかった。猟獲されたシカのすべての皮が移出されるわけではないから、「鹿皮」の数値を補正して狩猟頭数の推計値を得ることを考えた。その方法として、さしたる根拠もなく「鹿皮」の数値を2倍することにした。しかし、1875～77年の「皮数」に転記ミスによる数値のずれが紛れ込んで「頭数」にも波及し、1873年の「頭数」には計算ミスか誤記を残した（1878年の「頭数」の数値は説明できない）。

この想像に立つと、計算や転記の誤りがあり、それとは別次元の問題として1873～78年の「頭数」欄の数値の出し方には信じがたいほど乱暴な数値の加工があるこ

とになる。表1の「鹿皮」が実際の狩猟数より少ないだろうと考えるのは間違いではない。しかし、その数値を補正して狩猟数の推計値を得るにしても2倍とする根拠は何なのか。さらには、そうした数字の加工をしたことを何も説明しないことが許されるのか。こうして得た「頭数」の数値と「皮数」の数値を合計することに、数字遊び以上の意味があるのか。

《表1》の作成過程に関わってもう一つ指摘しておきたいのは、作成者は『開拓使事業報告 第三編』を自分で開き、「鹿皮」の数値を拾って集計する作業をしていないだろう、という点だ。そう推測する根拠は、1875～77年の「鹿皮」について翌年の数値を書き込む《表1》の誤りは、エゾシカと人との関係史についての古典的論文、犬飼哲夫「北海道の鹿とその興亡」（犬飼1952）にもあるという事実にある。犬飼論文は、『開拓使事業報告 第三編』の「鹿皮」の数値を一つの表にはせず、文章の合間に二つに分けて引いている。1873～77年の分を引いた1箇所目のうち1875～77年の分にこの誤りがあり、1878～81年分を引いた2箇所目は正しい数値を記す。1877年と78年に同じ30,469とあるのは変だと気づきそうなものだが、別のページに分けて記述したことが落とし穴になってしまったものか。

《表1》と同じページには、明治以降のエゾシカの歴史を簡単にたどる文章が掲載される。明示していないものの、この文章が犬飼論文に依拠している気配はかなり濃厚で、このことも《表1》と犬飼論文の関係を示唆する。

さらに邪推を重ねれば、犬飼論文のなかの数値を拾って《表1》を作成しようとしたとき、1877年と78年に同じ数値が並ぶのは不自然と感じたのではないだろうか。それを糸口に犬飼論文の典拠文献に溯ればその誤りに気づくことができるのだが、《表1》の作成者はそうはせず、30,000というこれに近い切りのいい数字を1878年の「皮数」欄に入れて、体裁を繕ったつもりだったのではないか。

なお、犬飼論文は『札幌県第一回勧業年報』掲載のシカ捕獲数、『北海道庁統計書』掲載の1905～19年のシカ捕獲数をいずれも誤りなく引いている。《表1》は、これらの数値も犬飼論文から拾ったのかもしれない。犬飼論文は、『開拓使事業報告 第三編』と『札幌県第一回勧業報告』から異なる数値が得られる1879～81年の分について、後者を本文中に引き、前者は参考用に注記する形で示している。これらの年について説明なく後者のみを引く《表1》の姿勢は、これを乱暴に踏襲したようにも見える。

以上、あまりに細かにこの表に付き合ってしまった。《表1》の作成過程についての私の憶測にはどこか間違

いがあるかもしれない。だが、この表が、極めて杜撰な数字の操作からなる代物で、まじめな議論の素材に決して使用してはならないことは明白だ。

おわりに

本稿では、明治期のエゾシカ猟獲数を推測する素材となるいくつかの数値について、それぞれの数値の性格などを説明しつつ示した。複数の数値の相互比較によって、『開拓使事業報告』記載の数値の一部について実際の猟獲数よりも少ない可能性を指摘したのは、一つの成果と言えるかもしれない。それらを組み合わせて全体像を描く作業が次には来るべきだろうが、ここではそこまで踏み込まず、素材提供に留めておく。

1987年に北海道が刊行した報告書に掲載された表が、この時期のシカの猟獲数について無用の混乱を生じさせてしまったことは残念だ。この報告書は、「野生動物分布等実態調査報告書」という表題が示すように1980年代におけるエゾシカの生息状況の実態をフィールドにおいて調査した結果を取りまとめることを主眼としたもので、『表1』やそれに関する文章部分は、いわば添え物のような位置付けのものだ。19～20世紀前半といった過去の事実について調べたり記述することには馴染みがない人が書いたものだったのだろう。

にもかかわらず30年以上もの間、この表が適切な批判を経ることなく使われてきてしまったのは、道の刊行物であることへの信頼に加え、明治期のシカ猟獲数を推計する素材が存在することを伝える既往文献（俵1979、1990ほか）があるためにそれと同様の数値を使っているに違いないという油断があったのだろうか。私自身は人とシカの関係史を追いつつも、明治期の統計値にあまり信頼を置かず、また狩猟数や生息数そのものには関心が薄かったため、主に自然系の研究者が作成するグラフなどの数値に十分な注意を払わずに来てしまった。人文系と自然系の研究者の相互協力という点で、反省すべき点があると感じる。同じようなことがこの報告書が掲載するこれに続く時期に関する表や、道が刊行した同様の報告書にはないのか、改めて検証する必要があるのではないかと。今後の課題として記しておきたい。

謝辞

本稿を作成するための史料調査について、北海道立文書館と北海道立図書館のお世話になった。北海道博物館

水島未記氏は、同館第15回企画テーマ展「エゾシカ」（2019年10月12日～15日）に向けて明治期以降のエゾシカ猟獲数の変遷を整理して示すことに取り組み、『野生動物分布等実態調査報告書—エゾシカ生態等調査報告書』掲載の出所不明の数値が出回っていることに気づく機会を与えてくれた。社団法人エゾシカ協会赤坂猛氏は、同報告書の問題点を明らかにしておくことの必要性を語り、気が乗らない筆者を促して下さった。以上、記して感謝申し上げる。

文献

- Agetsuma, Naoki 2018. A simple method for calculating minimum estimates of previous population sizes of wildlife from hunting records, PLoS ONE 13-6.
- 犬飼哲夫 1952. 北海道の鹿とその興亡. 北方文化研究報告 7: 1-45.
- 宇野裕之 2017. 北海道のエゾシカ個体群の順応的管理. 梶光一・飯島勇人(編) 2017. 日本のシカ—増えすぎた個体群の科学と管理. 東京大学出版会: 163-182.
- 大蔵省 1885. 開拓使事業報告 第三編. 大蔵省(復刻版1983. 北海道出版企画センター).
- 梶光一・宮木雅美・宇野裕之 2006. エゾシカの保全と管理. 北海道大学出版会.
- 梶光一・飯島勇人(編) 2017. 日本のシカ—増えすぎた個体群の科学と管理. 東京大学出版会.
- 札幌県 1885. 札幌県第一回勸業年報. 札幌県.
- 俵浩三 1979. 北海道の自然保護—その歴史と思想. 北海道大学図書刊行会.
- 俵浩三 1990. 北海道の自然保護—その歴史と思想(増補版). 北海道大学図書刊行会.
- 平田剛 2011. シカ受難の「明治開拓」. 近藤誠司・社団法人エゾシカ協会監修. エゾシカは森の幸 人・森・シカの共生. 北海道新聞社: 44-45.
- 藤原英司 1985. 北加伊エゾシカ物語 北海道の環境破壊史. 朝日新聞社.
- 北海道生活環境部自然保護課 1987. 野生動物分布等実態調査報告書—エゾシカ生態等調査報告書. 北海道生活環境部自然保護課.
- 水島未記 2019. 動物たちの150年【コラムリレー第30回】. <http://www.hk-curators.jp/archives/4136>.
- 山田伸一 2001. 「北海道鹿猟規則」の制定過程—毒矢猟の禁止を中心に. 北海道開拓記念館研究紀要 29: 207-228.
- 山田伸一 2006. 「北海道鹿猟規則」施行後のシカ猟. 北海道開拓記念館研究紀要34: 156 (1) -129 (28).
- 山田伸一 2010. 開拓使による奥尻島へのシカ移入とその後. 北海道開拓記念館研究紀要 38: 67 (40) -80 (27).
- 山田伸一 2011. 近代北海道とアイヌ民族—狩猟規制と土地問題. 北海道大学出版会.
- 山田伸一 2015. 明治初期北海道におけるシカの産業利用. 北方地域の人と環境の関係史 研究報告. 北海道開拓記念館: 149-172.

Materials for Estimation of Quantities of Hunted Sika Deer in Hokkaido during the Meiji Period

YAMADA Shin'ichi

With the goal of obtaining materials to facilitate estimation of quantities of hunted sika deer in Hokkaido during the Meiji period, this study compiles and makes key observations on statistical data.

This study refers to statistics printed in publications by the Hokkaido Development Commission, Sapporo Prefecture, and Hokkaido Government, as well as numerical data from archives of the Hokkaido Development Commission and Sapporo Prefecture, and publishes multiple tables.

Additionally, it observes the nature of numerical data from each source, and attempts comparison between several tables containing annual data from the same years.

While examining the basis for numerical data in deer hunting statistical tables for 1873-1920 printed in a report published in 1987 by Hokkaido Living Environment Nature Conservation Section, this study finds that these tables are completely unreliable.

